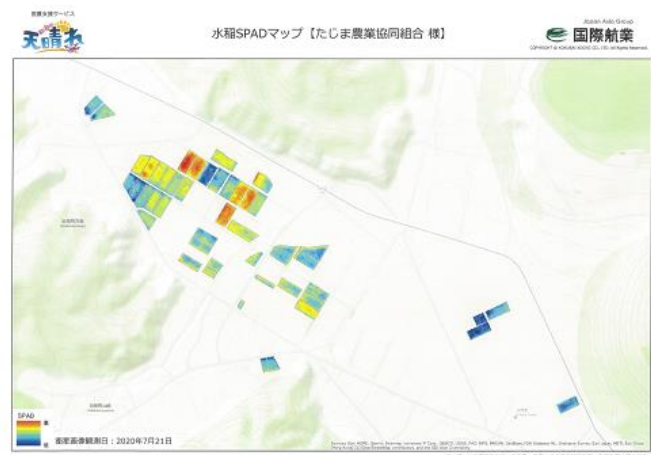


リモートセンシングを使った新しい水稻生産

Z-GIS と連携した人工衛星リモートセンシングの実証試験をおこなっている兵庫県 JA たじま管内のユメファームで、1回目のセンシングが終了しました。

センシング結果をもとに効率的な運用！

Z-GIS と連携した人工衛星リモートセンシングの実証試験をおこなっている兵庫県のユメファームを訪ね、1回目のセンシング結果を説明しました。当日は、全農兵庫県本部と国際航業の担当者も同行し、現場を確認しながらの説明となりました。



【図1】天晴れの衛星センシング画像

ユメファームでは、1回目の葉色と2回目の籾・穂水分、タンパク含有率のセンシングを予定しています。今回の訪問は1回目の結果を説明し、2回目の結果の見方を養ってもらうことが目的です。

1回目のセンシングは幼穂形成期を迎えた7月21日に実施しました。今年は、天候が悪く、調査日が大きく遅れたことで、一部のセンシング結果と実際の生育状況とに差異が見られました。これは生育が遅れたために落水時期が遅れ、水面が反射してハレーシ

ョンが起こったことが原因と考えられます。



【写真1】ソーシャルディスタンスを考え乾燥施設前の軒先での説明

現地調査をおこなった JA たじま TAC 担当者から調査の注意点を聞かれ、「例年通りのタイミング（1か月ごと）を心掛け、調査箇所を明確にすれば、全圃場を調査する必要はなく、基準点となる代表的な圃場の調査でよい」と回答しました。

JA たじまは、今回の結果を受け、JA 内部での情報共有と新規のセンシング利用者推進を進めていくとのことでした。



【写真2】ユメファームは GLOBAL G.A.P を取得している（代表：青山氏）



【写真3】最近完成したユメファームのショールームは、お客様との商談スペースでもある



【写真4】ユメファームのデザインマークやショールームは青山氏の発案によるもの

今回の調査について、ユメファーム青山氏からは、「穂肥時期・刈り取り適期の稲の状態を可視化（データを入手し確認）できるのは大変便利だと感じています。作業が重なりやすい時期でもあり、効率的なコンバイン・乾燥機の運用のための判断基準になると考えます。今年、試験的な導入でしたが、来年は地域の生産者とともに導入を検討したいと思います」とのご意見をいただき、センシングについて満足されている様子でした。

（全農 スマート農業推進室）